

平成21年度 第1回 芦屋市教育振興基本計画策定委員会会議録

| | |
|---------|---|
| 日 時 | 平成21年11月20日(金) 午後1時～3時 |
| 場 所 | 芦屋市役所 北館4階 教育委員会室 |
| 出 席 者 | 委員 長 井上 一郎 副委員 長 小石 寛文(欠席) 委 員 目黒 強 ・ 松本 朋子 ・ 山住 恭子 ・ 丹下 秀夫 ・ 増井 眞樹(欠席) ・ 前川 和世 ・ 永田 守 ・ 江守 易世 ・ 信岡 利英 ・ 極楽地 英子 ・ 上月 敏子 ・ 橋本 達広 ・ 磯森 健二(欠席) 事 務 局 教育長 藤原 周三 事務局長(管理部長) 波多野 正和 事務局次長(行政経営担当部長) 西本 賢史 事務局員(管理課長) 中務 行康 事務局員(学校教育課長) 伊田 義信 事務局員(生涯学習課長) 津村 直行 管理課課長補佐 長岡 良徳 |
| 事 務 局 | 管理部管理課 |
| 会議の公開 | 公 開 |
| 傍 聴 者 数 | 0人 |

1 会議次第

- (1) 開会
- (2) 委嘱状及び任命書の交付
- (3) 副市長挨拶
- (4) 委員紹介
- (5) 委員長の選任・副委員長の指名
- (6) 定足数の報告
- (7) 議題
 - 1.教育振興基本計画の策定について
 - 2.今後のスケジュール
 - 3.芦屋市の教育の望むもの
 - 4.その他

2 提出資料

| | | |
|----|----------------------------|-------|
| 資料 | 芦屋市教育振興基本計画策定委員会設置要綱及び委員名簿 | (資料1) |
| | 国及び県の教育振興基本計画(概要) | (資料2) |
| | 計画の位置づけ及び体制について | (資料3) |
| | 教育基本法概要 | (資料4) |
| | 国の教育基本計画 | (資料5) |
| | ひょうご教育創造プラン | (資料6) |
| | 策定委員会スケジュール等 | (資料7) |
| | 各種計画資料等 | (資料8) |

3 審議経過

<開会>

- 【事務局より挨拶】
- 【副市長より委員委嘱状及び任命書の交付】
- 【副市長より挨拶】
- 【委員紹介】
- 【委員長の選任, 副委員長の指名】
- 【委員長より挨拶】
- 【事務局より定足数の報告】

<議題>

(事務局波多野)【資料の説明】

(井上委員長) ありがとうございます。いろいろな資料が示されていますので、一気に消化はできませんので、資料を見ていただいて、今からは質問を頂きたいと思えます。そして、基本計画を策定するためのご意見をきかせていただきたいと思えます。スケジュールとして8月には原案ができていないといけないので、積極的にご意見をいただきたいと思えます。次回までに資料を見ていただいた上でもう一度ご質問、ご意見等をまとめていただきたいと思えます。大きな流れといたしまして私たちがここでまとめなくてはいけないのは、国における基本計画や次の段階として県の計画、芦屋市においては総合計画、生涯学習基本構想などがあります。これらを踏まえた形でよりいっそう具体的なものにするのが基本計画の位置づけです。こういった資料を見ながら今の流れで基本計画が作られていくことを考えて現段階としての質問等をいただけないでしょうか。

私が文部科学省におりました時に作っていた資料がありますので、資料の説明を補足する形でお話したいと思えます。

資料の2,4をご覧くださいと教育基本法のこと載っております。18年に改正が行われているポイントとして、教育の目標を縦で考えるということとしていいます。学校教育だけでなく生涯学習全体で考えるということ。機会均等として障がいがある方に対する教育であること。私学を明確にすること。家庭教育を小学校から進められていたものを幼児期から発展する流れで考えること。学校だけでなく家庭、地域ぐるみ、社会全体で作り上げることが打ち出されました。コミュ

ニティースクールにおいて学校運営に関わる協議会を行い、提案を出して学校づくりをするがこの当時話題になり、教育基本計画に位置づけられました。教育振興計画が平成20年7月から国の方で進められ学習指導要領にこの趣旨が引き継がれています。また、横の連携として、社会全体の連携などがあります。

それでは、委員会のことについてでも結構ですし、内容のこともいいので、ご質問はありませんか。

(極楽地委員) 今、私学の話が出ましたが、この会議は私学についても入るのですか、それとも公立の学校の教育方針を固めるのですか？

(事務局波多野) 私学は県の所管のため、芦屋の教育をどう考えるか検討してほしいと思います。

(極楽地委員) 芦屋の問題点は、芦屋が1番こう考えたいというものは何ですか？かけているところは何ですか？

(橋本委員) 28 ページに家庭の教育力についてと地域の教育力についてということで、平成20年度に生涯学習の推進基本構想をつくるために市民意識調査を実施しておりますが、調査結果から家庭の教育力は低下していると思うかという質問に対して、市民の意識として、ある程度そう思うが47%、まったくその通りだと思う30.3%ということでありました。調査時期は異なりますが国の同様の調査結果と比べると、ある程度そう思うが49.4%、まったくその通りだと思うが17.8%ということ、単純に考えて芦屋の市民のほうが家庭の教育力が落ちているという認識が強いと思います。原因としては、子どもに対して過保護、甘やかしすぎがあげられています。地域の教育力についても以前に比べて低下しているが58.5%。国の調査では、55.6%なので、芦屋市の市民の意識のほうが国よりも地域の教育力の低下の認識があるのではないかと思います。生涯学習としては地域や家庭との連携が困難になっています。原因は労働環境の変化から、親の子どもへのかかわりの時間がどうなのか、格差社会など家庭の不安が子どもに影響しているのではないかと思います。芦屋で独自で取り組むことは困難であり、本来なら国挙げての政策なのかなと思います。

(上月委員) 意見の中に子育ての問題とありましたが、平成19年度から3カ年に渡って国の学力・学習状況調査がありました。その結果の中で芦屋市の子どもたちは人間関係を作る、友達と話していて話題、相違点をすり合わせていくところがやや苦手なのではないか。自分は大切である、良いところがあるという気持ちを持てることがやや低いのではないか。成績は別として、そういったところが問題としてあがり、課題として教育委員会では分析しています。これは、家庭、学校、地域として考えていかないといけないところでもありますので、ぜひ皆さんもご自分の立場からでいいので教育について思われることをおっしゃっていただけたらと思います。

(永田委員) 現場で子どもたちと接する中で、自己肯定感が低い子が多いと感じます。子どもたちと話をする中で、どうせ俺なんかとか、なかなか気持ちが入っていかない

ことがあります。ずっと話を聞く中でようやく気持ちがわかることが多く、日々子どもたちへの指導の難しさを感じています。やはり肯定感が基本にありながら、さまざまな力が育っていくと思います。学校でもいろいろな場面で取り組んでいるのですが、現状はそんな感じであり、原因はいろいろあると思いますが、それをどうにかしたいと現場では思っています。

(松本委員) 次に集まるのが2月ということですが、現状がこうだとかという調査内容がありますが、これ以外にも調査を行うのですか。

(事務局波多野) 計画策定に対しての独自の市民意識調査は考えていません。これまでの関連の市民意識調査は実施しているので、参考になる資料があればもってきたいと思います。

(井上委員長) 資料の追加をお送りいただくこともあるということですね。

(事務局波多野) そうです。必要に応じて、お送りさせていただいて参考にさせていただきたいと思います。

(井上委員長) 会議の回数がそんなに多くないので、間に資料をお送りして情報を知らせていただきたいと思います。

(松本委員) 印象でしかないですが、学校の子たちを見ていて、児童会、生徒会、学級代表とか学校での役割のものはほとんど女子になるのではないかという傾向にある気がします。少し前は50代、60代の高齢者の孤独死が問題にありましたが、最近は30代でも孤独死とかあって、男子の将来が心配というか。男子が希望を持てるような社会でなくなっているのかなというのが最近の心配事にあります。そんな内容の調査結果はないのですか。

(井上委員長) 全国的な調査とかでも女子の方が成績が高い。他の国でもどの国も女子が高いところが多い。ですから男子に本を読ませたいという具体的に踏み込んだ計画としてもいいのではないのでしょうか。芦屋市でも特別な結果があればお知らせいただきたい。

それでは、普段から問題を感じている芦屋市の教育の中にある課題、皆さんのご意見を出していただく時間を多めに取りたいと思います。今お座りになっている順番でご意見をお願いします。

(目黒委員) 二点ほど、質問があります。まず一つ目は、芦屋市で子どもが増えているかどうかに関する基本的なデータが知りたい。たとえば、わたしが関わった自治体では、子どもの数が増え、高齢者の数も増えているという多子高齢化の地域の現状を踏まえ、どのような計画を立てるのかという形で進めていたもので、質問いたしました。もう一点は、基本計画の中で、幼稚園に入園する前の乳幼児が検討対象となってい

るのかについて教えていただきたい。

(事務局波多野) 教育基本計画でございますので、基本的には幼稚園教育の部分からとなります。次世代育成計画がそういった部分での計画でありますので、教育となりますとやはり幼稚園からになります。

(藤原教育長) 現在、子どもの数は芦屋市の場合、増えています。今後数年間は増え続けますが、その先は減ります。幼稚園の人数から割りだせばわかるのですが、芦屋の場合、幼稚園に6割、保育所に4割が通っています。年間800人がだいたい数字です。また、子どもたちの分布も偏在しています。浜のほうは減少が続いていますが、逆に市の中央から山手の方は増えています。学校は、校舎不足で苦しい思いをしていますが、数年先は減少に向かう、そういった状態です。

(目黒委員) そういうことを見越して、計画を立てるのかどうかで、考え方が変わるような気がいたします。今、お話しいただいたことについての感想ですが、芦屋市の中でも地域によって子どもの数が違ったり、校舎が足りなかったりといった問題点があるようですので、そのような点について、具体的にプランニングしていけば安心ではないでしょうか。そんなヒントが得られたと思います。

(松本委員) 労働に関する学習が今の社会状況を考えたときに、義務教育の間にもう少し何か学べるようなことはないかと思っていました。「トライやるウィーク」だけでなく、政権交代もあったので社会が変わるかどうかわからないのですが、高校ではアルバイトするかもしれないので、義務教育の間にもう少し何かできないだろうかと思えます。それから、読書タイムをもう少し工夫できないだろうか。学校図書館の充実ができないでしょうか。

(井上委員長) 私たちが計画を考える時のポイントとして、例えば図書館をどういう風にするのか。予算が絶えず絡んできます。どこまでいべきかという議論が出てくると思います。市の予算をあまり気にせず、図書館を増やしてほしいなら言うべきだし、読書推進事業のパネルディスカッションでもでしたが、移動図書館が必要であれば、意見をのべれば良いのではないのでしょうか。すべてまかなえるわけではないが、それが原案です。教育に関わる基本計画をできるだけ詳しく出す、それが結果的に市の予算に関わってくる時は、どうなるかわからないができる範囲でおさえるのがよいかと思えます。

(山住委員) 芦屋の先生たちがおっしゃる話ですが、忍耐力がない子どもたちが多いといいます。学校教育で競うことがなくなっています。私の子どものころは、よく競っていたが今はみんなが一緒、それが何故なのかと思えます。学校教育の中で競うことも必要なのではないのでしょうか。

(丹下委員) 私は教育委員会に5年間おりました。キャッチフレーズの国際文化住宅都市、ずっと長く言葉としてはありますが何も変わらない。身近なことという、宝塚市では20年前から文化的な表示を英語にしているとかあります。当時は国際文化住宅都市、国際という言葉がはやりました。私も中学校の派遣授業と外国の英語

指導助手を担当しました。しかし、予算がなくなり、担当授業がなくなりました。今だと英語教育が小学校でもやるようになっていたり、学校現場は学校のやりやすいようにやっています。予算が本当になくて、できないのかどうなのか。自分は英語が専門だが、英語を話せるようにさせるには、英語を話す機会を増やすことだと思います。例えば、放送活動をしているときに英語を流してみるとか、具体的な焦点を絞って話をすると私は話しやすいです。

子どもの忍耐力は子どもには責任がありません。大人の子どもに対する距離感が下手だと思います。現場では手軽になっている反面、摩擦を嫌がる。私が働いていた時の印象的な言葉は『電話は2回目まで』つまり、電話は連絡にしかならない、家に行けということです。若い教師は電話が多い。一番の厄介なのは人間関係づくりだと思いますが、若い先生は、そこが下手です。昨今いわれるように、もっとドロドロした中で人間関係は形成されるものです。豊かになって逃げ道ができてしまったと思います。家庭の教育力が落ちたのではなく、家族構成の中で経済力が上がれば、家族は寄り添う必要がなくなり、逆に経済力がなければ寄り添うしかありません。また、食べ物も食べたければ自分で作ればよい。中学生なら作れると思います。それは甘やかしなのか食育なのか。全部学校教育でまかなうのは無理です。学校教育は「知・徳・体」は絶対はずせないと思います。

(井上委員長) 例えば資料8に今までの成果が出ていますが、行政なので1番問題になっているのは何にお金をかけて、整備していくかということです。全部が理想的にはいかない中で、どこにお金をかけていくか、検討して具体的にしていく提案が計画と考えています。そのあたりを方針として明確にさせていただくこと。もう1つは、学校だけでできないこと、地域や市でできること、しなくてはいけないことがあります。その関わりをお互いに教育委員会で見定めながら、計画の中心であるべき教育に関わるところにできるだけ具体的にあわせる。これが、市全体に及ぼすような問題と連動して、いろいろやるときに教育の基本計画に書かれていることが少しでも関連づいて実現していただけるような具体案を私たちは持てばいいと思います。

(永田委員) ここ数年、団塊を迎えた先生がたくさん退職しています。小学校では毎年3、4人。5年経てば半数ぐらいの先生がいなくなると思います。そういった時にこれまでの培ってきたさまざまな学校文化、子どもとの関わり方をどう伝えていくべきか。若い先生も至らない点があっても一生懸命いい授業ができるように頑張っていますが、なかなか追いつかない状況です。そういった若い先生を支えることができるような施策が必要です。私が芦屋市に勤めはじめた時、芦屋は狭い町だが、海、川、山と都会の面もあれば豊かな自然もある。芦屋の持っている良さを生かした体験学習は意欲的なものになり、芦屋に住んでよかったと思えるようになるのではないかと思います。

(江守委員) 芦屋のコミュニティスクールは独自のものです。国の提唱するコミュニティスクールとは別のもので、国のコミュニティスクールは、学校から地域に対して、こういうことをしていきたい。と意見を出したり、協力を求めたりしていくものなのですが、芦屋の場合は、地域の小学校などの教育施設の空いている時間や場所を、その施設と調整して、地域住民が地域交流行事を計画したり、生涯学習

の場として利用しています。地域が発信する，地域全体が学校，学ぶ場所という考えです。私の地域の三条コミスクは，三条小学校が統廃合で無くなってしまいました，旧小学校区で地域活動を行っています。小学校＝コミュニティスクールではありません。

芦屋市の場合，山があり川があり海があり，小さなまちですが，それぞれの地域で特徴があるので，他の地域を訪ねることで，十分な体験学習ができると思います。

私事ですが，息子が小学校4年生の時，一番活発に学級活動に取り組んでいました。学級児童の個性や得意なことを活かし，学級・係活動など児童が役割分担し，一人ひとりが委員長となって動くことで，何かあれば，自分がしなくては行けないという自主性ができていました。個々の個性を見極め，認めていくことが必要だと思います。

(信岡委員) 学校教育を生涯学習の中に位置づけるというお話ですが，策定の大部分は学校教育の問題が占めると思います。私は10年程前から「20世紀を語り，戦争を通して平和を語る」語り部のボランティア活動を行っています。話をした子ども達から沢山の手紙や感想文を頂きました。私がこの策定に携わる部分は後半の一部でしょう。私が所属する芦屋川カレッジ学友会は芦屋川カレッジの終了生約2,400名を擁し，山中市長のお父様は第1期生，岡本副市長のお母様がカレッジの作詞をなさっていらっしゃる等，大変長い歴史を持っています。しかしながら会員の殆んどは，芦屋で生まれ育った人ではありません。先ずこの人達に芦屋に対する愛情を持ってもらわなければなりません。「この町が好き」という歌を流行らせているのはそのためです。高齢者が芦屋を愛してくれれば，いずれボランティア活動にもつながるだろうと思います。語り部活動も最近は小休止状態です。

(極楽地委員) 『このまちが好き』という歌は，私がPTAの会長をやっているときに，県から助成金を頂いたので，何かいいことに使いたいなと思って，実行委員会を作って，この歌を作りました。今は市の方で歌を取り上げていただいているので，本当にいい歌ができたなと思います。先ほど，山住委員から運動会の話が出ましたが，私も20年前に小学校の運動会に参加し選抜リレーをしましたが，それが運動会なのかなと少し物足りなかったです。委員会や学校，子供会で意見を出したら，昔のようなみんなで競う運動会を前はしていたが，足が早い子が遅い子に対するいじめがあったので，それでやめましたとのこと。面倒だからできないということであれば学校教育といえるのでしょうか。

コミュニティスクールを通して，いろんな要望がありますが，例えば，芦屋から大阪の方の高校に入学したときにレギュラーに入れたい。何故かというところ，すごく優しくデリケート，人を押しつけてでもレギュラーになる意欲がない。精神部分が劣っている。学校だけでなく，家庭教育が影響している。芦屋の子どもたちは過保護すぎる。学校や登下校でけんかしたりするとすぐに親がでる。子ども同士で解決するようなことも親が介入しています。

民生委員は0歳から大人たちまですべての方たちのために活動しなくては行けないかと思います。民生に関わらず，昔の普通概念，一般常識のバランスがくずれています。ある程度一般常識のラインを持っていただきたいと思います。

(前川委員)今いろいろお話を聞かせていただきながら、また新たに教育のあり方を考えながら聞かせていただいています。幼稚園は学校教育の始まりとすることで私たちも意識をしていますが、保護者の協力がより教育の場で必要であることは言うまでもありません。例えば、入園前の子どもたちが幼稚園の健診のあとに、ちょっとしたお土産を渡したときに、ありがとうと誰もいわない。一人だけ、お母さんが「ありがとうは？」というとその子はお礼を言う。それを私たちが褒めると、それを聞いた子どもたちは、お礼を言いました。やはり親の教育、大人の姿がそのまま子どもに響いていると痛感しました。でも幼稚園に入れば、みんなお礼やあいさつが言えるようになるので、幼稚園の教育は大切だと思いました。自信がないという話が出ましたが幼稚園でも最初は、やることに臆病だったり、失敗を嫌がることはありました。私がいつも言うのは、失敗は成功のもとといえます。子どもたちは失敗してもいいんだよね、失敗は成功のもとなんだよね、といえます。私も1000回失敗してもいいんだよと答えます。そういったことを常に大人たちが言う中で子どもたちは何でもやってみようと思うのではないのでしょうか。また保護者にも子育ての自信をつけていただくためにも、私たちの幼稚園では異年齢の少数グループを家族と呼び、遊んでいるのですが、そこに保護者も参加させ、一緒に絵本や縄跳びで遊んでいます。子どもたちも親が笑顔でいると子どもたちも楽しくなり、次の日も同じことをしようと遊んでいます。また幼稚園に出かける公民講座が年に1回あるのですが、先日はお母さん方も参加していただきました。小さいお子さんが多いと出かけることは大変ですが、園から呼びかければ、ほぼ100%参加してもらえます。介助員も幼稚園は手厚く配置していただいていることで、私の幼稚園から学校へ行った子どもも落ち着いて過ごしています。障がいをもった子ども小さいうちにどれだけ丁寧に接することができるかで、就学したとき落ち着いた生活ができるかが決まってくると思います。

(上月委員)ここ10年間の私たちの周りの変化を考えますと、ワープロを覚えたら、パソコン、携帯ができて、今は教師が1人に1台のパソコンを持つ時代。それだけものすごい変化があり、今後5年間でさらに変わっていくと思います。そういった中で子どもたちに本当に必要なものは、若い先生が増えてきたことを力にし、変革という視点を持つことではないのでしょうか。この事も勘案して、教育振興基本計画の中で方向性を示すことが必要だと思います。

(橋本委員)先ほど競争の話が出ましたが、大人社会でも競争がありますが、その時、私ならその子のタイムをどこまで知っているのか、そこから少しでも変われば褒める要素があります。そういった事を先生が心がけてほしいです。大人が変われば、子どもも変わる。大人が子どものモデルとなるような、そんな大人が増えることが本当の教育だと思います。

(井上委員長)今日は第1回目ということで、全体の説明、スケジュール確認後、ご意見をいただきました。これから芦屋市の課題に対する具体的な提案ができるといいと思います。それでは本日の議題はこのあたりで。事務局からお話することはありますか。

(事務局中務)次回の開催を2月中旬に予定しています。2月の7日の週、14日の週の間で

後日各委員に連絡しますので、お忙しいと思いますがよろしく申し上げます。

(事務局波多野) 資料につきまして次回までに、今日お配りした以外に関連する資料がありましたら用意します。また次回の現状と把握の部分に対して事務局でまとめたものなど、次回の議題にしてもらえものを合わせて事前に資料を送ります。こういった資料がないかというご依頼があれば、事務局まで個別に連絡ください。

(事務局中務) 本日は皆さんありがとうございました。最後に教育長のほうからご挨拶いたします。

(事務局藤原) 今日はありがとうございました。今回の委員会にむけて、時間不足ではなかったか後悔しています。私は、こういった教育基本計画を本来作るべきなのかどうなのかと否定的な考えを持っています。教育は目標があっても、ゴールはない。それを5年、10年で計画を作るのは無理があるのではと考えています。本市の場合でも本来、教育委員会がつくるべき。しかし国が市長部長で作れというのはなぜなのか。国が作った10年計画を見ても、今後10年を目指した教育の姿。目指すべき教育の方向。つまり、目指すべき教育の姿とともにお金をどこに入れるか考えるという国の計画。あきらかに財政的裏づけが必要という言葉が裏に隠れています。私は財政的裏づけがない行政はありえないと思う。そういった意味で作るべきだと思います。その中で私たちは5年計画を作ろうとしているのですが10年計画は不易な部分があがってくると思いますが、5年計画はある意味流行とまでは言わないが今取り組むべき内容です。これはゴールを目指すのではなく、こういったことに取り組ましましょう、努力しましょう、できればゴールまで行き着きましょう、でも行けなくてもいいじゃないか、と言う意味ではないでしょうか。そうなってくると芦屋の教育の現状、芦屋市の教育の基本計画を作るのですから、他の市ではなく、あくまでも芦屋市の現状の物をつくるべきです。そのためには芦屋の教育の現状を把握したい。皆さんの意見、関係機関からの意見をぜひ次回持ち寄ってほしいと思います。芦屋市の基本計画が決して形式的なものでなく実行性のある、それに向かって取り組めるものにしないといけない、そういった思いであります。芦屋市の現状を我々もたくさんの資料を持ち寄りますので皆さんの意見を賜りたいと思います。本当にありがとうございました。

(井上委員長) みなさん、どうもありがとうございました。おつかれさまでした。

< 閉会 >